

# 海潮音

上田敏

上田敏訳

青空文庫



遙に此書を滿州なる森鷗外氏に獻ず

大寺の香の煙はほそくとも、空  
にのぼりてあまぐもとなる、あ  
まぐもとなる

獅子舞歌

## 海潮音序

卷中收むる所の詩五十七章、詩家二十九人、伊太利亞に三人、英吉利に四人、獨逸に七人、プロワンスに一人、而して佛蘭西には十四人の多きに達し、曩の高踏派と今の象徴派とに屬する者其大部を占む。

高踏派の莊麗體を譯すに當りて、多く所謂七五調を基としたる詩形を用ゐ、象徴派の幽婉體を翻するに多少の變格を敢てしたるは、其各の原調に適合せしめむが爲なり。

詩に象徴を用ゐること、必らずしも近代の創意に非らず、これ或は山嶽と共に舊るきものならむ。然れども之を作詩の中心とし本義として故らに標榜する所あるは、蓋し二十年來の佛蘭西新詩を以て嚆矢とす。近代の佛詩は高踏派の名篇に於て發展の極に達し、彫心鏤骨の技巧實に燦爛の美を恣にす、今茲に一轉機を生ぜずむばあらざるなり。マラルメ、エルレエヌの名家之に觀る所ありて、清新の機運を促成し、終に象徴を唱へ、自由詩形を説けり。譯者は今の日本詩壇に對て、専ら之に則れと云ふ者にあらず、素性の然らしむる所か、譯者の同情は寧ろ高踏派の上に在り、はたまたダンヌンチオ、オオパネルの詩に注

げり。然れども又徒らに晦澁と奇怪とを以て象徴派を攻むる者に同ぜず。幽婉奇聳の新聲、今人胸奥の絃に觸るゝにあらずや。坦々たる古道の盡くるあたり、荊棘路を塞ぎたる原野に對て、之が開拓を勤むる勇猛の徒を貶す者は怯に非らずむば愴なり。

譯者嘗て十年の昔、白耳義文學を紹介し、稍後れて、佛蘭西詩壇の新聲、特にエルレーヌ、エルハアレン、ロオデンバッツハ、マラルメの事を説きし時、如上文人の作なほ未だ西歐の評壇に於ても今日の聲譽を博する事能はざりしが、爾來世運の轉移と共に清新の詩文を解する者、漸く數を増し勢を加へ、マアテルリンクの如きは、全歐思想界の一方に覇を稱するに至れり。人心觀想の默移實に驚くべき哉。近體新聲の耳目に嫻はざるを以て、倉皇視聽を掩はむとする人々よ、詩天の星の宿は徙りぬ、心せよ。

日本詩壇に於ける象徴詩の傳來、日なほ淺く、作未だ多からざるに當て、既に早く評壇の一隅に囁々の語を爲す者ありと聞く。象徴派の詩人を目して徒らに神經の鋭きに傲る者なりと非議する評家よ、卿等の神經こそ寧ろ過敏の徵候を呈したらずや。未だ新聲の美を味ひ功を收めざるに先ちて、早く其弊竇に戰慄するものは誰ぞ。

歐洲の評壇亦今に保守の論を唱ふる者無きにあらず。佛蘭西のブリュンチエル等の如きこれなり。譯者は藝術に對する態度と趣味とに於て、此偏想家と頗る説を異にしたれば、

其云ふ所に一々首肯する能はざれど、佛蘭西詩壇一部の極端派を制馭する消極の評論としては、稍耳を傾く可きもの無しとせざるなり。而してヤスナヤ・ポリヤナの老伯が近代文明呪詛の聲として、其一端をかの「藝術論」に露はしたるに至りては、全く贊同の意を呈する能はざるなり。トルストイ伯の人格は譯者の欽仰措かざる者なりと雖、其人生觀に就ては、根本に於て既に譯者と見を異にす。抑も伯が藝術論はかの世界觀の一片に過ぎず。

近代新聲の評隲に就て、非常なる見解の相違ある素より怪む可きにあらず。日本の評家等が僅に「藝術論」の一部を抽讀して、象徴派の貶斥に一大聲援を得たる如き心地あるは、毫も清新體の詩人に打撃を與ふる能はざるのみか、却て老伯の議論を誤解したる者なりと謂ふ可し。人生觀の根本問題に於て、伯と説を異にしながら、其論理上必須の結果たる藝術觀のみに就て贊意を表さむと試むるも難い哉。

象徴の用は、之が助を藉りて詩人の觀想に類似したる一の心状を讀者に與ふるに在りて、必らずしも同一の概念を傳へむと勉むるに非ず。されば靜に象徴詩を味ふ者は、自己の感興に應じて、詩人も未だ説き及ぼさざる言語道斷の妙趣を翫賞し得可し。故に一篇の詩に對する解釋は人各或は見を異にすべく、要は只類似の心状を喚起するに在りとす。例へば本書九〇頁「鷺の歌」を誦するに當て讀者は種々の解釋を試むべき自由を有す。此詩を廣

く人生に擬して解せむか、曰く、凡俗の大衆は眼低し。法利賽パリサイの徒と共に虚偽の生を營みて、醜辱汚穢の沼に網うつ、名や財や、はた樂欲を漁らむとすなり。唯、縹緲たる理想の白鷺は羽風徐に羽撃きて、久方の天に飛び、影は落ちて、骨蓬の白く清らにも漂ふ水の面に映りぬ。之を捉へむとしてえせず、此世のものならざればなりと。されどこれ只一の解釋たるに過ぎず、或は意を狭くして詩に一身の運を寄するも可ならむ。肉體の欲に饜きて、とこしへに精神の愛に飢ゑたる放縱生活の悲愁こゝに湛へられ、或は空想の泡沫に歸するを哀みて、眞理の捉へ難きに懂がる、哲人の愁思もほのめかさる。而して此詩の喚起する心状に至りては皆相似たり。一〇七頁「花冠」は詩人が黄昏の途上に佇みて、「活動」、「樂欲」、「驕慢」の邦に漂遊して、今や歸り來れる幾多の「想」と相語るに擬したり。彼等默然として頭俛れ、齎らす所只幻惑の悲音のみ。孤り此等の姉妹と道を異にしたるか、終に歸り來らざる「理想」は法苑林の樹間に「愛」と相睦み語らふならむといふに在りて、冷艶素香の美、今の佛詩壇に冠たる詩なり。

譯述の法に就ては譯者自ら語るを好まず。只譯詩の覺悟に關して、ロセツテイが伊太利古詩翻譯の序に述べたると同一の見を持したりと告白す。異邦の詩文の美を移植せむとする者は、既に成語に富みたる自國詩文の技巧の爲め、清新の趣味を犠牲にする事あるべか

らず。而も彼所謂逐語譯は必らずしも忠實譯にあらず。されば「東行西行雲眇々。二月三月日遅々」を「とざまにゆき、かうざまに、くもはるばる。きさらぎ、やよひ、ひうらうら」と訓み給ひけむ神託もさることながら、大江朝綱が二條の家に物張の尼が「月によつて長安百尺の樓に上る」と詠じたる例に従ひたる所多し。

明治三十八年初秋

上田敏



## 燕の歌

ガブリエレ・ダンヌンチオ

彌生<sup>やよひ</sup>ついたち、はつ燕、

海のあなたの静けき國の

便<sup>たより</sup>もてきぬ、うれしき文<sup>ふみ</sup>を。春のはつ花、にほひを尋<sup>と</sup>むる

あゝ、よろこびのつばくらめ。

黒と白との染<sup>そめわけ</sup>分<sup>じま</sup>綺<sup>ま</sup>は

春の心の舞姿。

彌生<sup>やよひ</sup>來<sup>き</sup>にけり、如<sup>ごと</sup>月<sup>げ</sup>は

風もろともに、けふ去りぬ。

栗鼠りすの毛衣けごろも脱ぎすてて、

綾子りんす羽ぶたへ今いま様に、

春の川瀬をかちわたり、

しなだるゝ枝の森わけて、

舞ひつ、歌ひつ、足速あしはやの

戀慕の人ぞむれ遊ぶ。

岡に摘む花、董ぐさ、

草は香りぬ、君ゆゑに、

素足の「春」の君ゆゑに。

けふは野山も新妻にひつまの姿に通ひ、

わだつみの波は輝く阿古屋珠あこやだま。

あれ、藪陰やぶかげの黒鶺鴒くろつぐみ、

あれ、なか空そらに揚雲雀あげひばり。

つれなき風は吹きすぎて、  
ふるすくは  
 舊巢啣へて飛び去りぬ。

あゝ、南なんごく國のぬれつばめ、  
をば尾羽は矢羽根やばねよ、鳴く音は弦つるを

「春」のひくおと、「春」の手の。

あゝ、よろこびの美うまどり鳥よ、

黒と白との水すゐかん干かんに、

舞の足どり教へよと、

しばし招がむ、つばくらめ。

たぐひもあらぬ麗れいじん人の

イソルダ姫の物語、

飾りえが畫けるこの殿とのに

しばしはあれよ、つばくらめ。

かづけの花環こゝにあり、

ひとやにはあらぬ花籠を

給ふあえかの姫君は、

フランチェスカの前ならで、

まことは「春」のめがみ大神。  
おほがみ

ものね  
聲曲

われはきく、よもすながら、わが胸の上うへに、君眠る時、

吾は聴く、夜の静寂しづけきに、滴したたりの落つるを將はた、落つるを。

常にかつ近み、かつ遠み、絶間たえまなく落つるをきく、

夜もすながら、君眠る時、君眠る時、われひとりして。

## ルコント・ドウ・リイル

眞晝まひる

「夏」の帝の「眞晝時」は、大野が原に廣がりて、  
 白銀色の布引に、青天くだし天降しぬ。  
 寂たるよもの光景かな。耀く虚空、風絶えて、  
 炎のころも纏ひたる地の熟睡の靜心。

眼路眇茫として極無く、樹蔭も見えぬ大野らや、  
 牧の畜の水かひ場、泉は涸れて音も無し。  
 野末遙けき森陰は、裾の界の線黒み、  
 不動の姿夢重く、寂寞として眠りたり。

唯熟したる麥の田は黄金海と連なりて、  
かぎりも波の搖蕩に、眠るも鈍と嘲みがほ、  
聖なる地の安らけき兒等の姿を見よやとて、  
畏れ憚るけしき無く、日の觴を嘸み干しぬ。

また、邂逅に吐息なす心の熱の穗に出で、  
囁聲のそこはかと、鬚長穎の胸のうへ、  
覺めたる波の搖動や、うねりも貴におほどかに  
起きてまた伏す行末は沙たち迷ふ雲のはて。

程遠からぬ青草の牧に伏したる白牛が、  
肉置厚き喉袋、涎に濡らす慵げさ、  
妙に氣高き眼差も、世の煩累に倦みしごと、  
終に見果てぬ内心の夢の衢に迷ふらむ。

人よ、爾の心中を、喜怒哀樂に亂されて、  
くわうみやうだう 光明道このはらの此原まひるの眞晝ひとを孤り過ぎゆかば、  
 の 光 明 道 の 此 原 の 眞 晝 を 孤 り 過 ぎ ゆ か ば 、  
 がれよ、こゝに萬物ばんぶつは、凡べて虚すぞ、日うつろは燬やかむ。  
 ものみな、こゝに命よろこび無く、悦よろこびも無し、はた憂無し。

されど涙なんだや笑せうせい聲まどひの惑まどひを脱はし、萬象ばんしやうの  
るてん 流轉さうの相さうを忘ぼうぜむと、心かわきの渴かわきいと切せちに、  
うつそみ 現身うつそみの世ゆるを赦ゆるしえず、はた詛のろひえぬ 觀くわんねん 念ねんの  
まなこ 眼まなこ放はなちて、幽遠まなこの大歡樂まなこを念まなこじなば、

來れ、此地てんじつの天日てんじつにこよなき法のりの言葉のりあり、  
 親えんじやうみ難むげんき炎むげん上むげんの無間むげんに沈むげんめ、なが思むげん、  
 かくての後だくせいは、濁だくせい世だくせいの都だくせいをさして行くもよし、  
 物の七なたび涅ニルワナ槃ニルワナに浸ひたりて澄ひたみし心ひたもて。

## 大饑餓

夢圓なる滄溟、濤の巻曲の搖蕩に  
 夜天の星の影見えて、小島の群と輝きぬ。  
 紫摩黄金の良夜は、寂寞としてまた幽に、  
 奇しき畏の満ちわたる海と空との原の上。

無邊の天や無量海、底ひも知らぬ深淵は  
 憂愁の國、寂光土、また譬ふべし、炫耀郷。  
 墳塋にして、はた伽藍、赫灼として幽遠の  
 大荒原の縦横を、あら、萬眼の魚鱗や。

青空かくも莊嚴に、大水更に神寂びて、



大光明の遍照に、へんぜう 宏くわうだい 大無邊界中むへんかいちゆうに、  
うつらうつらの夢枕、煩惱界の諸苦患しよくげんも、  
こゝに通はぬその夢の限も知らず大いなる。

かゝりし程に、あらはだ 粗膚ふくだみの蓬起皮ふかみのしなやかに  
飢にや狂ふ、おどろしき深海底ふかうみぞのわたり魚うを、  
あふさきさるさの徘徊もとほりに、身の鬱憂を紛れむと、  
なんぼんでつ 南蠻鐵あぎとの腮あぎとをぞ、くわつとばかりに開いたる。

もと 素もとより無邊天空を仰ぐにはあらぬ魚の身の、  
からすきゆく 參さんの宿しゆく、みつ 星せいや、さんかくせい 三角星さんかくせいや、てんかつきう 天蝎宮てんかつきう、  
むげん 無限むげんに曳ひける光くわうばう芒ぼうのゆくおもひてに思馳おもひするなく、  
ほくとせいぜん 北斗星前ほくとせいぜん、横だいはる大熊星だいしゆうせいもなにかあらむ。

唯、ひとすぢに、せいにく 生肉せいにくを噛かまむ、碎さいかむ、割さかばやと、

常の心は、朱あけに染み、血の氣けに欲たを湛たへつゝ、  
 影暗まなこうして水重き潮の底の荒くわうげん原げんを、  
 曇まなこれる眼まなこ、きらめかし、悽慘まなことして遅々たりや。

こゝ虚うつろなる無聲境むせいきやう、浮うべる物や、泳うぐもの、  
 生なきたる物も、死ししたるも、此空くう漠ぼくの荒野あらぬには、  
 音おとづれ信しんも無し、影かげも無し。たゞ水みづ先さきの小判こばん鮫ざめ、  
 眞黒まぐろの鱭ひれのひたうへに、沈しづ々として眠ねるのみ。

行きね妖怪あやかし、なれが身みも人間道にんげんだうに異いならず、  
 醜惡しうを、獐だう猛まう、暴ぼう戾れいのたえて異いなるふしも無し。  
 心安しんあんかれ、鱧ふかさめよ、明日あすや食くらはむ人間にんげんを。  
 又またさはいへど、汝なれが身みも、明日あすや食くはれむ、人間にんげんに。

聖せいなる飢うゑは 正しやう法ほふの永ながくつゞける 殺せつ生しやう業ごふ、

かげ深<sup>ふかうみ</sup>海も光明<sup>あま</sup>の天<sup>あま</sup>つみそらもけぢめなし。  
 それ人間も、鱧<sup>ふかざめ</sup>鮫<sup>ざんがい</sup>も、残<sup>ざんがい</sup>害<sup>がい</sup>の徒<sup>と</sup>も、餌<sup>えじき</sup>食<sup>じき</sup>等<sup>とう</sup>も、  
 見よ、死の神の前<sup>しのかみ</sup>にして、二つながらに罪<sup>つみ</sup>ぞ無<sup>な</sup>き。

## 象

沙漠<sup>たん</sup>は丹<sup>たん</sup>の色<sup>いろ</sup>にして、波<sup>なみ</sup>漫<sup>まん</sup>々<sup>く</sup>たるわだつみの  
 音<sup>おと</sup>しづまりて、日<sup>ひ</sup>に燉<sup>や</sup>けて、熟<sup>うまい</sup>睡<sup>とこ</sup>の床<sup>とこ</sup>に伏<sup>ふ</sup>す如<sup>ごと</sup>く、  
 不<sup>ふ</sup>動<sup>どう</sup>のうねり、大<sup>おほ</sup>らかに、ゆくらゆくらに傳<sup>つたは</sup>らむ、  
 人<sup>ひと</sup>住<sup>す</sup>むあたり銅<sup>あかがね</sup>の雲<sup>うん</sup>たち籠<sup>こ</sup>むる眼<sup>め</sup>路<sup>ぢ</sup>のすゑ。

命<sup>いのち</sup>も音<sup>ね</sup>も絶<sup>た</sup>えて無<sup>な</sup>し。餌<sup>え</sup>に飽<sup>あ</sup>きたる唐<sup>から</sup>獅<sup>し</sup>子<sup>し</sup>も、  
 百<sup>ひゃく</sup>里<sup>り</sup>の遠<sup>とほ</sup>き洞<sup>ほら</sup>窟<sup>あな</sup>の奥<sup>おく</sup>にや今<sup>いま</sup>は眠<sup>ね</sup>るらむ。  
 また岩<sup>いわ</sup>清<sup>しみず</sup>水<sup>みづ</sup>迸<sup>ほとばし</sup>る長<sup>ちやう</sup>沙<sup>うさ</sup>の央<sup>なか</sup>、青<sup>あお</sup>葉<sup>は</sup>かげ、

豹も來て飲む椰子森は、麒麟が常の水かひ場。

大日輪の走せ、る氣重き虚空鞭うつて、

羽搔の音の聲高き一鳥遂に飛びも來ず、

たまたま見たり、蟒蛇の夢も熱きか圓寢して、

とぐろの綱を動せば、鱗の光まばゆきを。

一天霽れて、そが下に、かゝる炎の野はあれど、

物鬱として、寂寥のきはみを盡すをりしもあれ、

皺だむ象の一群よ、太しき脚の練歩に、

うまれの里の野を捨て、大沙原を横に行く。

地平のあたり、一團の褐色なして、列なめて、

みれば砂塵を蹴立てつゝ、路無き原を直道に、

ゆくてのさきの障碍を、もどかしとてや、力足、

踏躡しこふむ勢に、遠の砂山崩れたり。

導にたてる年嵩のてだれの象の全身は

「時」が噛みてし刻みてし、老樹の幹のごとひわれ

巨巖の如き大頭、脊骨の弓の太しきも、

何の苦も無く自づから、滑らかにこそ動くなれ。

歩遅むることもなく、急ぎもせず、悠然と、

塵にまみれし群象をめあての國に導けば、

沙の畦くろ、穴に穿ち、續いて歩むともがらは、

雲突く修験山伏か、先達の蹤踏でゆく。

耳は扇とかざしたり、鼻は象牙に介みたり、

半眼にして辿りゆくその胸腹の波だちに、

息のほてりや、汗のほけ、烟となつて散亂し、

幾千萬の昆蟲が、うなりて集ふ餌食かな。

饑渴の攻や、貪婪の羽蟲の群もなにかあらむ、  
 黒皺皮の満身の膚をこがす炎暑をや。

かの故里をかしまだち、ひとへに夢む、道遠き  
 眼路のあなたに生ひ茂げる無花果の森、象の邦。

また忍ぶかな、高山の奥より落つる長水に

巨大の河馬の嘯きて、波濤たぎつる河の瀬を、

あるは月夜の清光に白みしからだ、うちのばし、

水かふ岸の葦蘆を踏み碎きてや、降りたつを。

かゝる勇猛沈勇の心をきめて、さすかたや、

涯も知らぬ遠のすゑ、黒線とほくかすれゆけば、

大沙原は今さらに不動のけはひ、神寂びぬ。

身動みじろきうと迂たびうどき旅人の雲のはたてに消ゆる時。

ルコント・ドウ・リイルの出づるや、哲學に基ける厭世觀は佛蘭西の詩文に致死の棺衣たれぎぬを投げたり。前人の詩、多くは一時の感慨を洩し、單純なる悲哀の想を鼓吹するに止りしかど、此詩人に至り、始めて、悲哀は一種の系統を樹て、藝術の莊嚴を帶ぶ。評家久しく彼を目するに高踏派の盟主を以てす。即ち格調定かならぬドウ・ミュツセエ、ラマルテイイヌの後に出で、始て詩神の雲髮を捉みて、之に慘嚴なる詩法の金櫛を加へたるが故也。彼常に「不感無覺」を以て稱せらる。世人輒もすれば、此語を誤解して曰く、高踏一派の徒、甘じて感情を犠牲とす。これ既に藝術の第一義を没却したるものなり。或は恐る、終に述作無きに至らむをと。あらず、あらず、此暫々濫用せらるゝ、「不感無覺」の語義を藝文の上より解する時は、單に近世派の態度を示したるに過ぎざるなり。常に宇宙の深遠なる悲愁、神祕なる歡樂を覺ゆるものから、當代の愚かしき歌物語が、野卑陳套の曲を反復して、譬へば情痴の涙に重き百葉の輕舟、今、藝苑の河流を閉塞するを敬せざるのみ。尋常世態の

瑣事、奚ぞよく高踏派の詩人を動さむ。されど之を倫理の方面より觀むか、人生に對する此派の態度、これより學ばむとする教訓は此一言に現はる。曰く哀樂は感ず可く、歌ふ可し、而も人は斯多阿學徒の心を以て忍ばざる可からずと。かの額付、物思はしげに、長髪わざとらしき詩人等も、此語には辟易せしも多かり。されば此人は藝文に劃然たる一新機軸を出し、者にして同代の何人よりも、其詩、哲理に富み、譬喩の趣を加ふ。「カイン」「サタン」の詩二つながら人界の災殃を賦し、「イパテイイ」は古代衰亡の頽唐美、「シリル」は新しき信仰を歌へり。ユウゴオが壯大なる史景を咏じて、臺閣の風ある雄健の筆を振ひ、史乘逸話の上に敘情詩めいたる豊麗を與へたと並びて、ルコント・ドウ・リイルは、傳説に、史蹟に、内部の精神を求めぬ。かの傳奇の老大家は歴史の上に燦爛たる紫雲を曳き、この憂愁の達人は其實體を闡明す。

\*

讀者の眼頭に彷彿として展開するものは、豪壯悲慘なる北歐思想、明暢清朗なる希



臘田野の夢、または銀光の朧々たること、其聖十字架を思はしむる基督教法の冥想、特に印度大幻夢涅槃の妙説なりけり。

\*

黒檀の森茂げき此世の涯の老國より來て、彼は長久の座を吾等の傍に占めつ、教へて曰く、「寂滅爲樂」。

\*

幾度と無く繰返したる大智識の教話によりて、悲哀は分類結晶して、頗る靜寧の姿を得たるも、なほ、をりふしは憤怒の激發に迅雷の轟然たるを聞く。是に於てか電火ひらめき、萬雷はためき、人類に對する痛罵、宛も藥綫の爆發する如く、所謂「不感無覺」の墻壁を破り了ぬ。

\*

自家の理論を詩文に發表して、シオペンハウエルの辨證したる佛法の教理を開陳したるは、此詩人の特色ならむ。儕輩の詩人皆多少憂愁の思想を具へたれど、厭世觀の理義彼に於ける如く整然たるは罕まれなり。衆人徒に虚無を讚す。彼は明かに其事實なるを示せり。其詩は智の詩なり。而も詩趣饒ゆたかにして、坐そろにペラスゴイ、キユクロプスの城址を忍しのばしむる堅牢の石壁は、かの纖弱の律に歌はれ、往々俗謠に傾ける當代傳奇の宮殿を摧かむとすなり。

エミール・エルハアレン

## ホセ・マリヤ・デ・エレディヤ

## 珊瑚礁

波の底にも照る日影、神寂びにたる曙の  
 照しの光、アピシニア亞比西尼亞、珊瑚の森にほの紅く、  
 ぬれにぞぬれし深ふかうみ海の谷限たにくまの奥に透すきい入れば、  
 輝きにはふ蟲のから、命にみつる珠たまの華。

ヨウド沃度に、鹽に、さ丹にづらふ海の寶のもろもろは  
 濡髪長き海藻かいさうや、珊瑚、海膽うに、苔こけまでも、  
 臙脂えんじり紫あかあかと、華奢くわしやのきはみの繪模様えいもように、  
 薄色ねびしみどり石、蝕むしばむ底ぞ被おほひたる。

鱗こけの光のきらめきに白瑛はくはふらう瑤たうを曇もらせて、  
 枝たづより枝を横いちだいぎよぎまに、何を尋たづぬる一大魚、  
 光すきい透すきい入すきいる水すきいかげに慵ものうげなりや、もとほりぬ。

忽こち紅こうくわむるが火わ飄ひへる思おもの色のいろ鯖ひれふるひ、  
 藍たゝを湛たゝへし静せい寂じやくの、かげほのぐらき青海波せいがいは、  
 水みづゆ揺ゆりうごく揺えふえい曳えいは、黄金わうごん、眞珠しんじゆ、青せいぎよく玉ぎよくの色いろ。

## 床

さゝらがた錦にしんを張はるも、荒あたらへ妙めうの白布しらぬの敷敷くも、  
 悲かなしさは墳おくつき塋えいのごと、樂たのしみしさは巢あなの如ごとしとも、  
 人生にんじやうれ、人ひといの眠ねり、つま戀こひふる、凡たゞべてこゝなり、

をさな兒も、老も若も、さをとめも、妻も、夫も。

葬事、まぐはひほがひ、烏羽玉の黒十字架に、

淨き水はふり散らすも、祝福の枝をかざすも、

皆こゝに物は始まり、皆こゝに事は終らむ、

産屋洩る初日影より、臨終の燭の火までも、

天離る鄙の伏屋も、百敷の大宮内も、

紫摩金の榮を盡して、紅に朱に矜り飾るも、

鈍色の櫛のつくりや、楓の木、杉の床にも。

獨り、かの畏も悔も無く眠る人こそ善けれ、

みおやらの生れし床に、みおやらの矢にし床に、

物古りし親のゆづりの大床に足を延ばして。

## 出征

高<sup>たか</sup>山<sup>やま</sup>の鳥<sup>と</sup>栖<sup>ぐら</sup>巢<sup>す</sup>だちし兄<sup>せう</sup>鷹<sup>う</sup>のごと、  
 身<sup>み</sup>こそたゆまね、憂<sup>う</sup>愁<sup>ん</sup>に思<sup>し</sup>は倦<sup>うん</sup>じ、  
 モゲルがた、パロスの港、船出<sup>ふねだ</sup>して、  
 雄<sup>を</sup>誥<sup>んげ</sup>ぶ夢<sup>む</sup>ぞ逞<sup>たくま</sup>ましき、あはれ、丈<sup>ます</sup>夫<sup>すら</sup>を。

チパンゴに在<sup>あ</sup>りと傳<sup>つた</sup>ふる鑛<sup>かな</sup>山<sup>やま</sup>の  
 紫<sup>しま</sup>摩<sup>わう</sup>黄金<sup>ごん</sup>やわが物<sup>もの</sup>と遠<sup>とほ</sup>く求<sup>もと</sup>むる  
 船<sup>ふね</sup>の帆<sup>ほ</sup>も撓<sup>し</sup>わり<sup>に</sup>けりな、時<sup>とき</sup>津<sup>つ</sup>風<sup>かぜ</sup>、  
 西<sup>にし</sup>の世界<sup>せかい</sup>の不思議<sup>ふしぎ</sup>なる遠<sup>とほ</sup>荒<sup>あ</sup>磯<sup>いそ</sup>に。

ゆふべゆふべは壯<sup>あ</sup>大<sup>した</sup>の旦<sup>あした</sup>を夢<sup>む</sup>み、  
 しらぬ火<sup>か</sup>や、熱<sup>ね</sup>帯<sup>たい</sup>海<sup>かい</sup>のかぢまくら、

こがねまぼろし幻通ふらむ。またある時は

白妙の帆船の舳へさき、たゞずみて、  
振ふりさけ放なげみれば、雲の果、見知らぬ空や、  
蒼わだつみ海の底よりのぼる、けふも新にひぼし星。

## 夢

シユリ・プリユドン

夢のうちには、農人のうにん曰く、なが糧かてをみづから作れ、  
 けふよりは、なを養はじ、土を墾ほり種を蒔けよと。  
 機織はたおりはわれに語りぬ、なが衣きぬをみづから織れと。  
 石造いしつくりわれに語りぬ、いざ鏝こてをみづから執れと。  
 かくて孤ひとり人間の群むれやはられて解とくに由なき  
 この咒詛のろひ、身にひき纏まとふ苦しさに、みそら仰あぎて、  
 いと深あはき憐愍あはれみ、愍あはれ垂たれさせ給へよと、禱いのりをろがむ  
 眼まのあたり前、ゆくての途みちのたゞなかを獅子はふたぎぬ。



ほのぼのとあけゆく光、疑ひて眼まなこひらけば、  
 雄々しかる田つくり男、梯はしだて立たに口笛鳴らし、  
 繪はたもの具ぐの躑木ふみぎもとどろ、小山田たねに種まそ蒔きたる。

世さちの幸しを今はた識りぬ、人の住むこの現うつしよ世よに、  
 誰かまた思ひあがりて、同胞はらからを凌あぎえせむや。  
 其日より吾はなべての世の人を愛しそめけり。

## シャルル・ボドレエル

信天翁 をきのたいふ

波路遙けき徒然つれづれの慰草なぐさめぐさと船人ふなびとは、

八重の潮路うみどりの海鳥うみどりの沖のの太夫たいふを生擒いけどりぬ、

楫かぢの枕ののよき友のよ心閑のけき飛鳥ひてうかな、

奥津潮騒おきつしほざゐすべりゆく舷ふなばた近くむれ集つれふ。

たゞ甲板かふはんに据ゑぬればげにや笑止せうしの極きはみなる。

この青雲あをぐもの帝王ていおうも、足どりふらゝ、拙せつくも、

あはれ、眞白ましろき双翼さうよくは、たゞ徒らたらに廣ひろごりて、

今は身の仇やう、益えきも無なき二つの權かゐと曳ひきぬらむ。

天飛ぶ鳥も、降りては、やつれ醜き瘡姿、  
 昨日の羽根のたかぶりも、今はた鈍に痛はしく、  
 煙管に嘴をつゝかれて、心無には嘲けられ、  
 しどろの足を摸ねされて、飛行の空に懂がるゝ。

雲居の君のこのさまよ、世の歌人に似たらずや、  
 暴風雨を笑ひ、風凌ぎ獵男の弓をあざみしも、  
 地の下界にやはられて、勢子の叫に煩へば、  
 太しき双の羽根さへも起居妨ぐ足まとひ。

薄暮の曲

時こそ今は水枝さす、こぬれに花の顫ふころ、

花は薰じて追風に、不斷の香の爐に似たり。

匂も音も夕空に、とうとうたたり、とうたたり、  
ワルツの舞の哀れさよ、疲れ倦みたる眩暈よ、

花は薰じて追風に、不斷の香の爐に似たり。

瘕きずに惱める胸もどき、  
オオロン樂がくの清搔すがきや、

ワルツの舞の哀れさよ、疲れ倦みたる眩暈くるめきよ、  
神輿みこしの臺をさながらの雲悲みて艶えんだちぬ。

瘕きずに惱める胸もどき、  
オオロン樂がくの清搔すがきや、

闇の涅槃ねはんに、痛ましく悩まされたる優やさこころ心。  
神輿みこしの臺をさながらの雲悲みて艶えんだちぬ、

日や落入りて溺るゝは、凝こびるゆふべの血潮雲ちしほぐも。

闇の涅槃ねはんに、痛ましく悩まされたる優やさこころ心、

光の過去のあとかたを尋めて集むる憐れさよ。  
 日や落入りて溺るゝは、凝るゆふべの血潮雲、  
 君が名残のたゞ在るは、ひかり輝く聖體盒。

破鐘  
やれがね

悲しくもまたあはれなり、冬の夜の地爐の下に、  
 燃えあがり、燃え盡きにたる柴の火に耳傾けて、  
 夜霧だつ闇夜の空の鐘、きゝつゝあれば、  
 過ぎし日のそこはかとなき物思ひやをら浮びぬ。

喉の太の古鐘きけば、その身こそうらやましけれ、  
 老らくの齢にもめげず、健やかに、忠なる聲の、  
 何時もいつも、梵音妙に深くして、穏どかなるは、

陣營の歩哨にたてる老兵の姿に似たり。

そも、われは心破れぬ。鬱憂のすさびごゝちに、  
寒空さむぞらの夜よるに響けと、いとせめて、鳴りよそふとも、  
覺束ねな、音ねにこそたてれ、弱聲よわこゑの細音ほそねも哀れ、

哀れなる臨終いまはの聲こゑは、血の波みづうみの湖の岸、  
小山かばねなす屍ねもとの下もとに、身動みじろぎもえならで死うする、  
棄ててられし負傷ておひの兵の息絶つひゆる終うめきの呻吟か。

## 人と海

こゝろ自由まよなる人間は、とはに賞めづらむ大海おほうみを。  
海こそ人の鏡なれ。灘の大波はてしなく、

水や天そらなるゆらゆらは、うつし心の姿にて、  
底そこひも知らぬ深ふか海の潮うしほの苦味にがみも世といづれ。

さればぞ人ひとは身を映うつす鏡の胸むねに飛び入りて、  
眼まなこに抱き腕うでにいだき、またある時は村むら肝ぎもの  
心こころもともに、はためきて、潮しほ騒さわ高く湧わくならむ、  
寄せてはかへす波なみの音ねの、物狂ものぐるほしき歎なげ息かひに。

海うみも爾いましもひとしなみ、不思議をつゝむ陰かげなりや。  
人ひとよ、爾いましが心しん中ちゆうの深淵しんせん探たんりしものやある。  
海うみよ、爾いましが水み底なぞこの富とみを數かずへしものやある。  
かくも妬ねたげに祕ひめ事ごとのさにはもあるか、海うみと人。

かくて劫ごふしよ初の昔むかしより、かくて無數むすうの歲月しげつを、  
慈悲じひ悔恨くわいこんの弛ゆる無みく、修羅しゆらの戰たたか酣はなに、

げにも非命と殺戮と、なじかは、さまで好もしき、  
 噫、永遠のすまうどよ、噫、怨念のはらからよ。

## 梟

黒葉水松の木下闇に  
 並んでとまる梟は

昔の神をいきうつし、  
 赤眼むきだし思案顔。

體も崩さず、ちつとして、

なにを思ひに暮がたの

傾く日脚推しこかす

大凶時となりにけり。



鳥のふりみて達人は  
 道の悟や開くらむ、  
 世に忌々しきは煩惱と。

色相界しきさうかいの妄執まうしふに

諸人しよにんのつねのくるしみは  
 居きよに安やすんぜぬあだ心。

現代の悲哀はボードレエルの詩に異常の發展を遂げたり。人或は一見して云はむ、これ僅に悲哀の名を變じて鬱悶と改めしのみと、而も再考して終に其全く變質したるを曉らむ。ボードレエルは悲哀に誇れり。即ち之を詩章の龍蓋帳中に据ゑて、黒衣聖母の觀あらしめ、絢爛なること繪畫の如き幻想と、整美なること彫塑に似たる夢思とを恣にして之に生動の氣を與ふ。是に於てか、宛もこれ絶美なる獅身女頭獸なり。

悲哀を愛するの甚しきは、いづれの先人をも凌ぎ、常に悲哀の詩趣を讚して、彼は自ら「悲哀の煉金道士」と號せり。

\*

先人の多くは、惱心地定かならぬまゝに、自然に對する心中の愁訴を、自然其物に捧げて、尋常の失意に泣けども、ボドレエルは然らず。彼は都府の子なり。乃ち巴里叫喊地獄の詩人として胸奥の悲を述べ、人に叛き世に抗する數奇の放浪兒が爲に、大聲を假したり。其心、夜に似て暗愴、いひしらず、汚れにたれど、また一種の美たとへば、濁江の底なる眼、哀憐悔恨の凄光を放つが如きもの無きにしもあらず。

エミール・エルハアレン

ボドレエル氏よ、君は藝術の天にたくひなき凄慘の光を與へぬ。即ち未だ曾て無き一の戦慄を創成したり。

中クトル・ユウゴオ



譬諭ひゆ

主は讚ほむべき哉、無明むみやうの闇や、憎多にくみき

今の世にありて、われを信徒となし給ひぬ。

願はくは吾に與へよ、力と沈勇とを。

いつまでも永く狗子いぬのやうに従ひてむ。

生贄いけにへの羊、その母のあと、従ひつつ、

何の苦もなく、牧草ぼくさうを食はみ、身に生ひたる

羊毛のほかに、その刻來ときぬれば、命をだに

惜まらずして、主に奉る如くわれもなさむ。

ポオル・エルレエヌ

また魚とならば、御子の頭かしらがたと字象りもし、  
 驢馬ともなりては、主を乗せまつりし昔思ひ、  
 はた、わが肉より穢はらひ給ひし豕みを見いづ。

げに末つ世の反抗表裏の日にありては

人間よりも、畜生の身ぞ信深くて

心素直すなほにも忍辱にんにくの道守るならむ。

### よくみるゆめ

常によく見る夢乍ら、奇あやし、懐なつかし、身にぞ染む。

曾ても知らぬ女ひとなれど、思はれ、思ふかの女ひとよ。

夢見る度のいつもいつも、同じと見れば、異りて、

また異ことならぬおもひびと、わが心こゝろ根ねや悟りてし。

わが心根を悟りてしかの女ひとの眼に胸のうち、  
噫あゝ、彼かの女ひとにのみ内ない證しょうの祕めたる事ぞ無かりける。  
蒼ざめ顔のわが額、しとゞの汗を拭ひ去り、  
涼しくなさむ術すべあるは、玉の涙のかのひとよ。

栗色髪あかげのひとなるか、赤髪あかのひとか、金髪か、  
名をだに知らね、唯思ふ朗ら細音ほそねのうまし名は、  
うつせみの世を疾とく去りし昔の人の呼名よびなかと。

つくづく見入る眼まなざし差は、匠たくみが彫りし像の眼か、  
澄みて、離れて、落居たる其音おんじやう聲すゑの清しさに、  
無言むじんの聲の懐かしき戀ふししき節ふしの鳴り響く。

落葉らくえふ

秋の日の

中オロンの

ためいきの

身にしみて

ひたぶるに

うら悲し。

鐘のおとに

胸ふたぎ

色かへて

涙ぐむ

過ぎし日の

おもひでや。

げにわれは

うらぶれて

こゝかしこ

さだめなく

とび散らふ

おちほ  
落葉かな。

佛蘭西の詩はユウゴオに繪畫の色を帯び、ルコント・ドウ・リイルに彫塑の形を具へ、エルレエヌに至りて音樂の聲を傳へ、而して又更に陰影の匂なつかしきを捉へむとす。

譯者





## 良心

革かは衣ころも纏まとへる兒等を引具ひきぐして

髪おどろ色蒼ざめて、降る雨を、

エホバよりカインは離さかり迷ひいで、

夕闇の落つるがまゝに愁しうねん然と、

大原おほはらの山の麓にたどりつきぬ。

妻は倦み兒等も疲れて諸もろこゝろ聲こゑに、

「地つちに伏していぎ、いのねむ」と語りけり。

山陰やまかげにカインはいねず、夢おぼろ、

烏羽玉やみよの暗夜の空を仰ぎみれば、

廣大の天<sup>てん</sup>眼<sup>がん</sup>くわつと、かしこくも、  
物陰の奥より、ひしと、みいりたるに、  
わなゝきて「未だ近し」と叫びつつ、  
倦みし妻、眠れる兒等を促して、  
もくねんと、ゆくへも知らに逃<sup>のが</sup>れゆく。  
かゝなべて、日には三十日<sup>みそか</sup>、夜は、三十夜<sup>みそよ</sup>、  
色變へて、風の音にもをのゝきぬ。  
やははれの、伏眼<sup>ふしめ</sup>の旅は果もなし、  
眠なく休<sup>い</sup>ひもえせで、はろばろと、  
後の世のアシユルの國、海のほとり、  
荒磯<sup>ありそ</sup>にこそはつきにけれ。「いぎ、こゝに  
とゞまらむ。この世のはてに今ぞ來<sup>こ</sup>し、  
いぎ」と、いへば、陰雲暗きめぢのあなた、  
いつも、いつも、天<sup>てん</sup>眼<sup>がん</sup>ひしと睨みたり。  
おそれみに身も世もあらず、戦<sup>を</sup>きて、

「隠せよ」と叫ぶいつせい一聲。兒等こらはただ  
猛き親を口に指あて眺めたり。

沙漠の地、毛織の幕に住居する

後の世のうからのみおやヤバルにぞ

「このむたに幕ひろげよ」と命ずれば、

ひるがへる布の高壁めぐらして

鉛もて地に固むるに、金髪かねの

孫むすめ曙のチラは語りぬ。

「かくすれば、はや何も見給ふまじ」と。

「否まなしなほも眼まなこ睨む」とカインいふ。

角かくを吹つき鼓つづみをうちて、城きのうちを

ゆきめぐる民たみぐさ草のおやユバルいふ、

「おのれ今固かたき守まもりや設たてけむ」と。

銅あかの壁か築ねき上げて父の身を、

そがなかに隠いかにしぬれども、如何いかせむ、

「いつも、いつも眼睨む」といらへあり。

「恐しき塔をめぐらし、近よりの

難きやうにすべし。砦守る城築あげて、

その邑を固くもらむ」と、エノクいふ。

鍛冶の祖トバルカインは、いそしみて、

宏大の無邊都城を營むに、

同胞は、セツの兒等、エノスの兒等を、

野邊かけて狩暮しつゝ、ある時は

旅人の眼をくりて、夕されば

星天に征矢を放ちぬ。これよりぞ、

花崗石、帳に代り、くろがねを

石にくみ、城の形、冥府に似たる

塔影は野を暗うして、その壁ぞ

山のごと厚くなりける。工成りて

戸を固め、壁建終り、大城戸に

刻める文字を眺むれば「このうちに

神はゆめ入る可からず」と、ゑりにたり。

さて親は石殿せきでんに住すまはせられたれど、

憂愁のやつれ姿ぞいぢらしき。

「おほぢ君、眼は消えしや」と、チラの間へば、

「否、そこに今もなほ在り」と、カインいふ。

「墳塋おくつきに寂しく眠る人のごと、

地の下にわれは住すまはむ。何物も

われを見じ、吾われも亦何をも見じ」と。

さてこゝに坑あなを穿うがてば「よし」といひて、

たゞひとり闇穴道あんけつだうにおりたちて、

物陰の座にうちかくる、ひたおもて、

地下ちげの戸を、はたと閉ぢづれば、こはいかに、

天眼てんがんなほも奥津城おくつきにカインを眺む。

ユウゴオの趣味は典雅ならず、性情奔放にして狂飈激浪の如くなれど、温藉静冽の氣自から其詩を貫きたり。對聯比照に富み、光彩陸離たる形容の文辭を疊用して、燦爛たる一家の詩風を作りぬ。

譯者

## フランソア・コペエ

## 禮拜

さても千八百九年、サラゴサの戦たゝかひ

われ時に軍曹なりき。此日慘憺を極む。

街まち既に落ちて、家を圍むに、

閉ぢたる戸毎に不順の色見え、

鐵火、窓より降りしきれば、

「憎つくき僧徒の振舞」と

かたみに低く罵ののしりつ。

明あけがた方よりの合戦に

眼は硝煙に血走りて、



舌には苦がき紙筒を

噛み切る口の黒くとも、

奮闘の氣はいや益しに、

勢猛に追ひ迫り、

黒衣長袍ふち廣き帽を狙撃す。

狭き小路の行進に

とぎま、かうざま顧みがち、

われ軍曹の任にしあれば、

精兵従へ推しゆく折りしも、

忽然として中天赤く、

鑛爐の紅舌さながらに、

虐殺せらるゝ婦女の聲、

遙かには轟々の音とよもして、

歩毎に伏屍累々たり。

屈でくぐる軒下を

出でくる時は銃劍の

鮮血淋漓たる兵が、

血紅ちへにに染みし指をもて、

壁に十字を書置くは、

敵潜めるを示すなり。

鼓うたせず、足重く、

將校たちは色曇り、

さすが、手練てだれの舊ふるつはもの兵も、

落居ぬけはひに、寄添ひて、

新兵もどきの胸さわぎ。

忽ち、とある曲きよくかく角かくに、

援兵と呼ぶ佛語の一聲、

それ、戦友の危急ぞと、

駆けつけ見れば、きたなしや、

ひじろ  
日常は猛けき勇士等も、  
しやうじや  
精舎の段の前面に

たゞ僧兵の二十人、

圓頂ゑんちやうの黒鬼こつぎに、くひとめらる。

眞白の十字胸につけ、

靴無き足の凜々しさよ、

血染かひなの腕巻きあげて、

大十字架にて、うちかゝる。

惨絶、壯絶。それと一齊射撃にて、

やがては掃蕩したりしが、

冷然として、残忍に、軍は倦みたり。

皆心中やまに疾しくて、

とかくに殺戮したれども、

醜行すで已に爲し了はり、

密雲漸く散ずれば、

積みかさなれる屍より

階きざはしかけて、紅流べにれ、

そのうしろ樓門聳ゆ、巍然として鬱たり。

燈明くらがりに金こん色しきの星ときらめき、

香爐かぐはしく、靜寂かの香を放ちぬ。

殿上、奥深く、神壇むかに對ひ、

歌樓かろうのうち、やさけびの音おとしらぬ顔、

蕭しめやかに勤ごんぎやう行營ぎやうむ白髮長身の僧。

噫おもけふもなほおも涕かにして浮びこそすれ、

モオル 廊の古院、

黒衣僧兵のかばね、

天日、石だゝみを照らして、

紅流けぶりに烟たち、

臃ろうく々たる低き戸かまちの框に、

立つや老僧。

神壇龕つしのやうに輝き、

唾然としてすくみしわれらのうつけ姿。

げにや當年の己は

空恐ろしくも信心無く、

或日しやうじや精舎の奪掠に

負けじ心の意氣張つよく

神壇近き御燈みあかしに

煙草つけたる亂行者らんぎやうもの、

うはぞりひげ上反鬢きおひに氣負みせ、

一步も譲らぬ氣象のわれも、

たゞ此僧の髪白く白く

神寂びたるに畏みぬ。

「打て」と土官は號令す。

誰有て動く者無し。

僧は確に聞きたらむも、

さあらぬ素振神々しく、

聖水大盤を捧げてふりむく。

ミサ禮拜半に達し、

司僧むき直る祝福の時、

腕は伸べて鶴翼のやう、

衆皆一歩たじろぎぬ。

僧はすこしもふるへずに

信徒の前に立てるやう、

妙音澱なく、和讃を咏じて、

「歸命頂禮」の歌、常に異らず、

聲もほがらに、

「全能の神、爾等を憐み給ふ。」

またもや、一聲あらゝかに

「うて」と士官の號令に

進みいでたる一卒は

隊中<sup>なうて</sup>有名の卑怯者、

銃執<sup>じゅうと</sup>りなほして發砲す。

老僧、色は蒼<sup>あを</sup>みしが、

沈勇<sup>まなこ</sup>の眼明らかに、

祈りつゞけぬ、

「父と子と。」

續いて更に一發は、

狂氣<sup>ちまよひ</sup>のさたか、血迷か、

とかくに業<sup>ごふ</sup>は了りたり。

僧は隻<sup>かたうで</sup>腕、壇にもたれ、

明いたる手にて祝福し、

黄金盤わうこんばんも重たげに、

虚空こくうに恩赦おんしやの印しるしを切りて、

音聲おんじやうこそは微かすかなれ、

※たる堂上げきとほりよく、

瞑目めいもくのうち述ぶるやう、

「聖靈と。」

かくて仆たふれぬ、禮拜らいはいの事了りて。

盤ばんは三たび、床上に跳りぬ。

事に慣れたる老兵も、

胸おそれに鬼胎をかき抱き

足に兵器を投げ棄てて

われとも知らず膝つきぬ、



醜行のまのあたり、  
殉教僧のまのあたり。

聊爾<sup>れうじ</sup>なりや「アアメン」と  
うしろに笑ふ、わが隊の鼓手。

牟ルヘルム・アレント

わすれなぐさ

ながれのきしのひともとは、  
みそらのいろのみづあさぎ、  
なみ、ことごとく、くちづけし  
はた、ことごとく、わすれゆく

## 山のあなた

山のあなたの空遠く

「幸」<sup>さいはひ</sup> 住むと人のいふ。

噫、われひとゝ尋め<sup>と</sup>ゆきて、

涙さしぐみかへりきぬ。

山のあなたになほ遠く

「幸」<sup>さいはひ</sup> 住むと人のいふ。

カアル・ブッセ

## 春

森は今、花さきみだれ

艶<sup>えん</sup>なりや、五月<sup>さつき</sup>たちける。

神よ、擁護<sup>おうご</sup>をたれたまへ、

あまりに幸<sup>さち</sup>のおほければ。

やがてぞ花は散りしほみ、

艶<sup>えん</sup>なる時も過ぎにける。

神よ擁護<sup>おうご</sup>をたれたまへ、

あまりにつらき災<sup>とが</sup>な來<sup>こ</sup>そ。

パウル・バルシユ



## 秋

けふつくづくと眺むれば、  
悲の色口かなしみいろちにあり。

たれもつらくはあたらぬを、  
なぜに心の悲める。

秋風あきかぜわたる青木立あをこたち

葉なみふるひて地にしきぬ。  
きみが心のわかき夢

秋の葉となり落ちにけむ。

オイゲン・クロアサン



## ヘリベルタ・フォン・ポシンゲル

## わかれ

ふたりを「時」<sup>とき</sup>がさきしより、

晝は事なくうちすぎぬ。

よろこびもなく悲まず、

はたたれをかも怨むべき。

されど夕闇おちくれて、

星の光のみゆるとき、

病の床のちごのやう、

心かすかにうめきいづ。





## 水無月

子守歌風に浮びて、

暖かに日は照りわたり、

田の麥は足穂たりほうなだれ、

茨には紅き果熟し、

野面のもせには木の葉みちたり。

いかにおもふ、わかきをみなよ。

テオドル・ストルム

## ハインリッヒ・ハイネ

## 花のをとめ

妙たへに清らの、あゝ、わが兒こよ、  
 つくづくみれば、そゞろ、あはれ、  
 かしらや撫でゝ、花の身の  
 いつまでも、かくは清らなれと、  
 いつまでも、かくは妙たへにあれと、  
 いのらまし、花のわがめぐしご。

ルビンスタインのめでたき樂譜に合せて、ハイネの名歌を譯したり。原の意を汲み

て餘さじと、つとめ、はた又、句讀停音すべて樂譜の示すところに従ひぬ。

譯者

瞻望  
せんぼう

怕るゝか死を。——喉塞ぎ、  
おそ

おもわに狭霧、  
さぎり

深雪降り、木枯荒れて、著るくなりぬ、  
みゆき

すゑの近さも。

夜の稜威暴風の襲來、恐ろしき  
よる みいづあらし おそひ

敵の屯に、  
たむろ

現身の「大畏怖」立てり。しかすがに  
うつそみ だいゐふ

猛き人は行かざらめやも。  
たけ

それ、旅は果て、峯は盡きて、

ロバート・ブラウニング

障礙しやうげは破やれぬ、

唯、すゑの譽ほまれむくひの酬むくえむとせば、

なほひと戰いくさ。

たたかひひ 戦いくさは日ひごろの好このみ いざゝらば、

ををはりはれ 終はつの晴はれの勝負しやうぶせむ。

なまじひに眼まなこふたぎて、赦ゆるるされて、

這はひ行くは憂うし、

否いな、殘のこりなく味あぢはひて、かれも人なる

いにしへの猛も者さたちのやう、

矢や表おもてに立ち樂うましよ世よの寒さむ冷さ、苦くる痛しみ、暗くら黒やみの

貢みつぎのあまり捧たげてむ。

そも勇者ゆうしやには、忽こつ然ねんと禍わざはひ福ひくに轉まずべく

闇やみは終はつらむ。

四大しだいのあらび、忌ゆる々々しかる羅らせつ刹つの怒ど號がう、

ほそりゆき、雜まじりけち

變化へんげして苦くも樂らくとならむとやすらむ。  
 そのとき 光くわうみやう 明みやう、その時御胸みむね、  
 あはれ、心の心とや、抱いだきしめてむ。  
 そのほかは神のまにまに。

## 出現

苔むしろ、飢うゑたる岸も

春來れば、

つと走る光、そらいろ、

菫咲く。

村雲むらぐものしがむみそらも、

こゝかしこゝ、

やれやれて影はさやけし、

ひとつ星。

うつし世の命を耻はぢの

めぐらせど、

こぼれいづる神のゑまひか、

君がおも。

## 岩陰に

一

嗚呼、物古ものふるりし鳶とび色いろの「地ち」の微ほ笑ゑみのおほ大きおほやかに、  
親したしくもあるか、今朝けさの秋あき、偃ひなたぼこり曝ばくに其その骨ほねを



延のぼし横よこへ、膝ひざ節ぶしも足あしも、つきいで、漣さざなみの  
 悦よろこび勇ゆうみ、小こ躍をどりに越こゆるがまゝに浸ひたりつゝ、  
 さて欵そぼだつる耳みみもとの、さゞれの床とこの海うみ雲ひばり雀すずめ、  
 和にこ毛げの胸むねの白しろ妙たへに嘖てんずる聲こゑのあはれなる。

## 二

この教かんこそ神かみながら舊ふるるき眞まことの道みちと知しれ。  
 翁おきなびし「地ち」の知ちりて笑わらむ世よの試こころみぞかやうなる。  
 愛あいを捧たげて價ねうち値ちあるものゝみをこそ愛あいしなば、  
 愛まつは完またき益えきにして、必かならずらずや、身みの利ととならむ。  
 思おもひの痛いたみ苦くるみに、卑いやしきこゝろ清きよめたる  
 なれ自らを地ちに捧たげ、酬むくひは高たかき天あまに求もとめよ。

## 春の朝

時は春、

日は朝、  
あした朝は七時、  
あした片岡に露みちて、  
かたをか揚雲雀なのりいで、  
あげひばり蝸牛枝に這ひ、  
かたつむり神、そらに知ろしめす。  
しすべて世は事も無し。  
な

## 至上善

蜜蜂の囊にみてる  
ふくろ  
一歳の香も、  
ひとせ  
花も、  
にはひ

寶玉の底に光れる鑛かなやま 山の富も、不思議も、  
 阿古屋貝映し藏かくせるわだつみの陰かげも、光も、  
 香にほひ、花、陰、光、富、不思議、及およぶべしやは、  
 玉ぎよくよりも輝まことく眞まこと、  
 珠たまよりも澄すみたる信義、  
 天地あめつちにこよなき眞まこと、澄すみわたる一いちの信義は  
 をとめこの清きくちづけ。

ブラウニングの樂天説は、既に二十歳の作「ポオリイン」に顯れ、「ピパ」の歌、  
 「神、そらにしろしめす、すべて世は事も無し」といふ句に綜合せられたれど、一  
 生の述作皆人間終極の幸福を豫言する點に於て一致し「アソランドオ」絶筆の結句  
 に至るまで、彼は有神論、靈魂不滅説に信を失はざりき。此詩人の宗教は基督教を  
 元としたる「愛」の信仰にして、尋常宗門の繩墨を脱し、教外の諸法に對しては極  
 めて宏量なる態度を持せり。神を信じ、其愛と其力とを信じ、之を信仰の基として、

人間恩愛の神聖を認め、精進の理想を妄なりとせず、藝術科學の大法を疑はず、又人心に善惡の奮闘争闘あるを、却て進歩の動機なりと思惟せり。而してあらゆる宗教の教義には重を措かず、たゞ基督の出現を以て説明すべからざる一の神祕となせるのみ。曰く、宗教にして、若し、萬世不易の形を取り、萬人の爲め、豫め、劃然として具へられたらむには、精神界の進歩は直に止りて、厭ふべき凝滯はやがて來らむ。人間の信仰は定かならぬこそをかしけれ、教法に完了といふ義ある可からずと。されば信教の自由を説きて、寛容の精神を述べたるもの、「聖十字架祭」の如きあり。殊に晩年に莅みて、教法の形式、制限を脱却すること益著るく、全人類に亘れる博愛同情の精神愈盛なりしかど、一生の確信は終始毫も渝ること無かりき。人心の憧がれ向ふ高大の理想は神の愛なりといふ中心思想を基として、幾多の傑作あり。「クレオン」には、藝術美に倦みたる希臘詩人の永生に對する熱望の悲音を聞くべく、「ソオル」には、事業の永續に不老不死の影ばかりなるを喜ぶ事の果敢なき夢なるを説きて、更に個人の不滅を斷言す。「亞刺比亞の醫師カアシツシユの不思議なる醫術上の經驗」といふ尺牘體には、基督教の原始に遡りて、意外の側面に信仰の光明を窺ひ、「沙漠の臨終」には神の權化を目撃せし聖約翰の遺言を耳に

し得べし。然れども是等の信仰は、盲目なる狂熱の獨斷にあらず、皆冷靜の理路を辿り、若しくは、精練、微を穿てる懷疑の坩堝を経たるものにして「監督ブルウグラムの護法論」「フェリシユタアの念想」等之を證す。之を綜ぶるに、ブラウニングの信仰は、精神の難關を凌ぎ、疑惑を排除して、光明の世界に達したるものにして永年の大信は世を終るまで動かざりき。「ラ、セイジャス」の秀什、この想を述べて餘あり、又、千八百六十四年の詩集に收めたる「瞻望」の歌と、千八百八十九年の詩集「アソランドオ」の絶筆とは此詩人が宗教觀の根本思想を包含す。

譯者

## ネリアム・シエイクスピア

## 花くらべ

燕も来ぬに水仙花、

大寒おほさむこさむ三月の

風にもめげぬ凜々りん々しさよ。

またはジユノウのまぶたより、

イナス神かみの息いきよりも

なほ臍ちらふたくもありながら、

董の色のおぼつかな。

照る日の神も仰ぎえで

嫁とつぎもせぬに散りはつる

色蒼いろあをざめし 櫻さくらさう草、

これも少女をとめの習ならひかや。

それにひきかへ九輪くりんさう草、

編笠あみがさ早百合ささゆり氣がつよい。

百合もいろいろあるなかに、

鳶尾いちはつぐさ草のよけれども、

あゝ、今は無し、しよんがいな。

## クリステイナ・ロセツテイ

## 花の教

心をとめて窺へば花おのづか自ら教あり。

朝露あさつゆの野薔薇のいへる、

「艶えんなりや、われらの姿、

刺とげに生おふる色香いろかとも知れ。」

麥生むぎふのひまに罌粟けしのいふ、

「せめては紅あかきはしも見よ、

そばめられたる身なれども、

験げんある露の薬水を

盛りさゝげたる盃ぞ。」



この時、百合は追風に、

「見よ、人、われは言葉なく  
法を説くなり。」

みづからなせる葉陰より、

聲もかすかに すみれぐさ 堇草、

「人はあだなる香かをきけど、

われらの示す教をしごと曉らじ。」

## ダンテ・ゲブリエル・ロセツテイ

## 小曲

小曲は刹那をとむる 銘文しるしづみ、また譬ふれば、

過ぎにしも過ぎせぬ過ぎしひと時に、劫ごふの「心」の

捧げたる 願文ぐわんもんにこそ。光り匂ふ法の會のりのため、

祥さがもなき 預言かねごとのため、折からのけぢめはあれど、

例いつも例いつも堰せきあへぬ思おも豊ゆたかにて切せちにあらなむ。

「日ひ」の歌は象牙にけづり、「夜よる」の歌は黒檀に彫えり、

頭かしらなる華はなのかざしは輝きて、阿古屋あこやの珠たまと、

照りわたるきらびの榮はえの藤らふたさを「時とき」に示せよ。

小曲は古泉こせんの如く、それが表おもて、心あらはる、  
 うらがねをいづれの力しろすとも。あるは「命」の  
 威力あるもとの貢みつぎ、あるはまた貴あてに妙たへなる  
 「戀」の供奉ぐぶにかづけの纏頭はなと贈らむも、よし遮さあらばあれ、  
 三瀬川みつせかは、船はて處ところ、陰暗かげくらき伊吹いぶきの風に、  
 「死」に拂はらふ渡わたりのしると、船人ふなびとの掌てにとらさむも。

## 戀の玉座

心こころのよしと定めたる「力」ちからかざかず、たぐへみれば、  
 「眞」まことの唇くちはかしこみて「望」のぞみの眼まなこ、天仰そめあがぎ  
 「譽」ほまれは翼つばさ、音高おとだかに埋うづみ火みびの「過去」くわこ、煽あふぎぬれば  
 飛火とびひの焰ほ、紅あか々と炎えん、上じやうのひかり忘ぼう却やくの  
 去いなむとするを驚おどろし、飛とび翔かけるをぞ控かへたる。

また後朝きぬぎぬに巻きまきし玉の柔手やはての名残よと、  
 黄金こがねくしげのひとすぢを肩に残し、  
 「若き世わかよ」や、  
 「死出しで」の挿頭かざしと、例も例もあえかの花を編む  
 「命いのち」。

「戀こひ」の玉座ぎよくざは、さはいへど、そこにしも在あじ、空遠そとほく、  
 逢瀬あふせ、別わかれの辻風つじかぜのたち迷ふあたり、離さかりたる  
 夢も通はぬ遠とほつぐに、無言しごまの局奥つぼおく深く、  
 設けられたり。たとへそれ、「眞まこと」は「戀こひ」の眞心まごころを  
 夙つとに知る可く、「望のぞみ」こそ、それを預言かねごとし、「譽ほまれ」こそ  
 そがためによく、「若き世わかよ」めぐし、「命いのち」惜をしとも。

## 春の貢

草うるはしき岸うへの上に、いと美はしき君が面おも。

われは横へ、その髪を二つにわけてひろぐれば、  
 うら若草のはつ花も、はな白みてや、黄金なす  
 みぐしの間のこゝかしこ、面映げにも覗くらむ。  
 去年とやいはむ今年とや年の境もみえわかぬ  
 けふのこの日や「春」の足、半たゆたひ、小李の  
 葉もなき花の白妙は雪間がくれに迷はしく、  
 「春」住む庭の四阿屋に風の通路ひらけたり。

されど卯月の日の光、けふぞ谷間に照りわたる。  
 仰ぎて眼閉ぢ給へ、いざくちづけむ君が面、  
 水枝小枝にみちわたる「春」をまなびて、わが戀よ、  
 温かき喉、熱き口、ふれさせたまへ、けふこそは、  
 契もかたきみやづかへ、戀の日なれや。冷かに  
 つめたき人は永久のやはれ人と貶し憎まむ。

## ダンテ・アリギエリ

## 心も空に

心も空に奪はれて物のあはれをしる人よ、

今わが述ぶる言の葉の君の傍かたへに近づかば

心に思ひ給ふこと應いらへ給ひね、洩れなくと、

綾あやに畏かしこき大御神「愛」の御名みなもて告げまつる。

さても星影きらゝかに、更け行く夜よるも三つ一つ

ほとほと過ぎし折しもあれ、忽ち四方よもは照渡り、

「愛」の御姿みすがたうつそ身に現あらはれいでし不思議さよ。

おしはかるだに、その性さがの恐おそろしときく荒神あらがみも

御氣色いと麗はしく在すが如くおもほえて、  
御手にはわれが心の臓、御腕には貴やかに  
あえかの君の寢姿を、衣うちかけて、かい抱き、

やをら動かし、交睫の醒めたるほどに心の臓、  
さゝげ進むれば、かの君も恐る恐るに聞しけり。  
「愛」は乃ち馳せ走りつ、馳せ走りながら打泣きぬ。

## 鷺の歌

ほのぐらき黄金隠沼、  
骨蓬の白くさけるに、  
静かなる鷺の羽風は  
徐に影を落しぬ。

水の面に影は漂ひ、  
廣がりて、ころもに似たり。  
天なるや、鳥の通路、  
羽ばたきの音もたえだえ。

エミイル・エルハアレン



漁子すなどりのいと賢さかしらに

清らなる網をうてども、

空翔そらかける奇くしき翼の

おとなひをゆめだにしらず。

また知らず日に夜よをつぎて

溝みぞのうち泥どろつち土の底

鬱憂の網に待つもの

久方ひさかたの光に飛ぶを。

ボドレエルにほのめき、エルレエヌに現はれたる詩風はこゝに至りて、終に象徴詩の新體を成したり。此「鷺の歌」以下、「嗟嘆」に至るまでの詩は多少皆象徴詩の風格を具ふ。

法の夕のりゆふべ

夕日の國は野も山も、その「平安」や「寂寥」の  
ねづみ黝けぬのの色おほの毛布おほもて掩おほへる如く、物寂ささびぬ。  
ばんぶつなべ萬物とくの凡とくのて整とくのふり、折とくのりめ正とくのしく、ぬめらかに、  
かたち物の象かたちも筋かたちめよく、ビザンチンかたごと繪かたごとの式かたごとの如かたごと。

時雨村雨しぐれむらさめ、中空なかぞらを雨あめの矢數やかずにつんざきぬ。  
 見よ、一天いつてんは紺こんじやう青あおの伽藍らうの廊らうの色いろにして、  
 今こそ時は西山せいざん山さんに入日傾いりひかへく夕ゆふまぐれ、

日の金色こんじきに烏羽玉よるの夜の白銀しろがねまじるらむ。

めぢの界さかひに物も無し、唯遠とほなが長なき並木路なみきみち、  
路に沿ひたる檜きの樹は、巨人の列つらの佇立たゝずまひ、  
疎まばらに生おふる筭はゝきぎ木ぎや、新墾にひばり小田をだの末すきすかけて、  
鋤休すきすめたる野のらまでも領りやうずる顔の姿なかな。

木立こだちを見れば沙門しゃもん等らが野邊のべの送おくりいとなみに、

夕暮ゆふぐがたの悲あはれを心に痛み歩あゆむごと、

また古いにしへの六部ろくぶ等らが後世ごせ安樂あんらくの願ねがひかけて、

靈場りやうちやう詣まうで、杖重ぼうじんく、番ばんの御寺みでらを訪まひしごと。

赤々あか々として暮あれかゝる入日いりひの影かげは牡丹花ぼたんくわの

眠あれる如ごとくうつろひて、河添かはぞひ馬道めだう開ひけたり。

噫あゝ、冬枯ふゆがらや、法師ほうしめくかの行列ぎやうぎを見てあれば、

たとしへもなく静しずかなる夕ゆふべの空そらに一一ふたならび列り、

瑠璃の御空の金砂子、星輝ける神前に  
進み近づくと夕づとめ、ゆくてを照らす星辰は  
壇に捧ぐる御明の大燭臺の心にして、  
火こそみえけれ、其棹の闇浮提金ぞ隠れたる。

## 水かひば

ほらあなめきし落窪の、  
夢も曇るか、こもり沼は、  
腹しめすまで浸りたる  
まだら牡牛の水かひ場。  
坂くだりゆく牧がむれ、

牛は練りあし、馬は、  
時しもあれや、落日に  
嘯き吼ゆる黄牛よ。

日のかぐろひの寂 寞や、  
色も、にほひも、日のかげも、  
梢のしづく、夕 榮も。

霧は刈穂のはふり衣、  
夕闇とぎす路遠み、  
牛のうめきや、斷末魔。

おそれ  
畏怖

北きたに面むかへるわが畏怖おそれの原はらの上に、  
牧羊おきなの翁な、神樂かぐら月角つきかくを吹く。  
物憂ものうれき羊小舎ひつじこやのかどに、すぐだちて、  
災殃まがつびのごと、死しの羊群ひつじぐらを誘さそふ。

きし方かたの悔くいをもて築きづきたる此小舎こやは  
かぎりもなき、わが憂愁うれの邦くにに在りて、  
ゆく水のながれ薄荷めいご菘さすみにおほはれ、  
いざよひの波なみも重おもきか、蜘蛛手くもてに澱よじむ。

肩かたに赤十字せきじゅうじある墨染すみぞめの小羊こやよ、  
色いろもの凄せつき羊群ひつじぐらも長棹ながさの鞭むちに  
撻うたれて歸かへる、たづたづし、罪つみのねりあし。

疾風はやてに歌うたふ牧羊おきなの翁な、神樂かぐら月つきよ、

今、わが頭掠めし稻妻の光に  
 この夕おどろおどろしきわが命かな。

## 火宅

嗚呼、爛壞せる黄金の毒に中りし大都會、  
 石は叫び烟舞ひのぼり、  
 驕慢の圓蓋よ、塔よ、直立の石柱よ、  
 虚空は震ひ、勞役のたぎち沸くを、  
 好むや、汝、この大畏怖を、叫喚を、  
 あはれ旅人、  
 悲みて夢うつら離りて行くか、濁世を、  
 つゝむ火焰の帯の停車場。

中空なかぞらの山やまけたたまし跳をどり過すぐる火輪くわりんの響おと。

なが胸こがを焦はやす早鐘はやがね、陰々かげと、とよもす音おとも、

この夕ゆふべ、都會とくわいに打ちぬ。炎上えんじやうの焰えん、赤々あかく、

千萬せんまんの火粉ひのこの光ひかり、うちつけに面おもてを照てらし、

聲こゑ黒くろきわめき、さけびは、妄執やじやくの心こゝろの矢聲やこゑ。

満身まんじんすべて洗聖とくせいの言葉ことばに振ねぢれ、

意志いしあへなくも狂瀾きやうらんにのまれをはんぬ。

實げに自らみづかを誇ほこりつゝ、將はた、詛のろひぬる、あはれ、人の世ひとよ。

時鐘とけい

館やかたの闇やみの静しずかなる夜よるにもなれば訝いぶしや、

廊下らうかのあなた、かたことと、杖かせづゑのおと、杖おとの音おと、



「時」の階のあがりおり、小股に刻む音なひは  
これや時鐘の忍足。

硝子の蓋の後には、白鐵の面飾なく、  
花形模様色褪めて、時の数字もさらぼひぬ。  
人の氣絶えし渡殿の影ほのぐらき朧月よ、  
これや時鐘の眼の光。

うち沈みたるねび聲に機のおもり、音ひねて、  
槌に鏝の音もかすれ、言葉悲しき木の函よ、  
細身の砂の指のおと、片言まじりおぼつかな、  
これや時鐘の針の聲。

角なる函は櫛づくり、焦茶の色の框はめて、  
冷たき壁に封じたる棺のなかに隠れすむ

「時」の老骨、きしきしと、數囓む音の齒ぎしりや、

これぞ時鐘の恐ろしさ。

げに時鐘こそ不思議なれ。

あるは、木履を曳き悩み、あるは徒跣に音を竊み、  
 忠々しくも、いそしみて、古く仕ふるはした女か。  
 柱時鐘を見詰むれば、針のコムパス、身の搾木。

## ジョルジュ・ロオデンバッハ

たそがれ  
黄昏

夕暮がたの蕭しめやかさ、燈火あかり無き室まの蕭しめやかさ。

かはたれ刻どきは蕭しめやかに、物靜かなる死の如く、

朧おぼろ々の物影のやをら浸み入り廣ひろがるに、

まづ天井の薄うす明あかり、光は消えて日も暮れぬ。

物靜かなる死の如く、微ほ笑ゑみ作るかはたれに、

曇れる鏡よく見れば、別わかの手振てぶりうれたくも

わが俤おもは蕭しめやかにすべにうり失せなむ氣色けはひにて、

影薄れゆき、色蒼いろあをみ、絶たえなむとして消けつべきか。

壁に掲けたる油畫に、あるは朧に色褪めし、  
 框をはめたる追憶の、そこはかとなく留まれる  
 人の記憶の圖の上に心の國の山水や、  
 筆に匂がける風景の黒き雪かと降り積る。

夕暮がたの蕭やかさ。あまりに物のねびたれば、  
 沈める音の絃の器に、柝をかけたる思にて、  
 無言を辿る戀なかの深き二人の眼差も、  
 花毛氈の唐草に絡みて縊るゝ夢心地。

いと徐ろに日の光隠ろひてゆく蕭やかさ。  
 文目もおぼろ、蕭やかに、噫、蕭やかに、つくねんと、  
 沈黙の郷の偶座は一つの香にふた色の  
 匂交れる思にて、心は一つ、えこそ語らね。



銘しるし文ぶみ

夕まぐれ、森こみちの小路よつつじの四辻よつつじに

夕まぐれ、風かぜのもなかの逍遙せうえうに、

竈かまどの灰かや、歳さい月げつに倦つかみ勞つかれ來きて、

定ぢやう業ごふのわが行末ぎやうまつもしらま弓ゆみ、

杖たすと侍さむらひむ。

路みちのゆくてに「日ひ」は多おほし、

今更いまさらながら、行いきてむか。

ゆふべゆふべの旅枕りよせ、

アンリ・ドウ・レニエ

水こえ、山こえ、夢こえて、

つひのやどりはいづかたぞ。

そは玄妙げんめうの、靜寧せいねいの「死し」の大神おほかみが、

わがまなこ、閉ぢ給ふ國、

黄金わうごんの、浦安うらやすの妙たへなる封ふうに。

高檜たかがしの寂寥せきれうの森の小路よ。

岩角いがんかくに懈怠けたいよろぼひ、

きり石せきに足弱あしよわ悩み、

歩むあゆ毎ごと、

きしかたの血潮ちしほ流れて、

木枯こがらしの颯々さつさつたりや、高檜たかがしに。

噫、われ倦みぬ。

赤楊はんのきの落葉らくえふの森の小路よ。

道行く人は木葉なす、  
このは

蒼あをざめがほの耻のおも、

ぬかりみ迷ひ、群れゆけど、

かたみに避けて、よそみがち。

泥ぬかりみ凜ぬかりみの、したりの森の小路よ、

憂いうしう愁を風は葉並に囁きぬ。

しろがねの、月つき代の霜さゆるこもりぬ隠沼は

たそがれに、この道のはてによど澱みて

げにこゝは「鬱うつ憂」の

鬼おにが栖すむ國。

秦とねりこ皮この、真ま砂さご、いさごの、森の小路よ、

微そよ風かぜも足あし音おとたてず、

梢こより梢こにわたり、

山やま蜜みつの色いろよき花はなは



金色こんじきの砂子すなごの光、

おのづから曲れる路は

人さらになぞへを知らず、

このさきの都のまちは

まれびとを迎ふときゝぬ。

いざ足をそこに止めむか。

あなくやし、われはえゆかじ。

他の生しやうの途みちのかたはら、

「物影ものかげ」の亡骸なきがら守る

わが「願ぐわん」の通夜つやを思へば。

高檜たかがしの路みちわれはゆかじな、

秦皮とねりこや、赤楊はんのきの路みち、

日のかたや、都のかたや、水のかた、

なべてゆかじな。

噫、小路、

血やにじむわが足のおと、

死したりと思ひしそれも、

あはれなり、もどり來たるか、

地響ぢひびきのわれにさきだつ。

噫、小路、

安逸あんいつの、醜辱しうじよくの、驕慢けうまんの森の小路よ、

あだなりしわが世よの友か、吹風ふくかぜは、

高榿たかがしの木下蔭このしたかげに

聲こゑはさやさや、

涙なみださめざめ。

あな、あはれ、きのふゆゑ、夕暮悲し、

あな、あはれ、あすゆゑに、夕暮くる苦し、

あな、あはれ、身のゆゑに、夕暮重し。

## 愛の教

いづれは「夜」<sup>よる</sup>に入る人の  
をさな心も 青<sup>せい</sup>春<sup>しゅん</sup>も、

今はた過ぎしけふの日や、

従<sup>しゅうよう</sup>容<sup>よう</sup>として、ひとりきく、

「冬<sup>ふゆ</sup>筆<sup>ひちりき</sup>築」にさきだちて、

「秋」に響かふ「夏<sup>なつ</sup>笛」<sup>ふえ</sup>を。

(現<sup>げん</sup>世<sup>せ</sup>にしては、ひとつなり、

物のあはれも、さいはひも。)

あゝ、聞<sup>き</sup>け、樂<sup>がく</sup>のやむひまを

「長<sup>なが</sup>月<sup>つき</sup>姫<sup>ひめ</sup>」と「葉<sup>は</sup>月<sup>つき</sup>姫<sup>ひめ</sup>」、

なが「憂<sup>うれ</sup>愁<sup>しう</sup>」と「歡<sup>かん</sup>樂<sup>らく</sup>」と

語らふ聲の蕭やかさ。

(熟しうみたるくだもの、  
つはりて枝や撓むらむ。)

あはれ、微風、さやさやと

伊吹のすゑは木枯を

誘ふと知れば、憂かれども、

けふ木枯もそよ風も

口ふれあひて、熟睡せり。

森蔭はまだ夏緑、

夕まぐれ、空より落ちて、

笛の音は山鳩よばひ、

「夏」の歌「秋」を揺りぬ。

曙の美しからば、

その晝は晴れわたるべく、

心だに優しくあらば、

身の夜も樂しかるらむ。

ほゝゑみは口のさうび花、

もつれ髪がみ、鬢わげにゆふべく、

眞清水ましみづやいつも澄みたる。

あゝ人よ、「愛」を命のりの法とせば、

星や照らさむ、なが足を、

いづれは「夜」よるに入らむ時。

## 花冠

途のつかれに項うなじ垂れて、

黙もく然ぜんたりや、おもかげの

あらはれ浮ぶわが「想」おもひ。

命の朝のかしまだち、

世路せいろにほこるいきほひも、

今、たそがれのおとろへを

透しみすれば、わなゝきて、

顔背そむくるぞ、あはれなる。

思ひかねつゝ、またみるに、

避けて、よそみて、うなだるゝ、

あら、なつかしのわが「想」。

げにこそ思へ、「時」の山、

山越えいでゝ、さすかたや、

「命」の里に、もとほりし

なが足音もきのふかな。

さて、いかにせし、盃に

水やみちたる。としごろの

願ぐわんの泉はとめたるか。

あな空手むなでくちびら、唇乾くちびらき、

とこしへの渴かつに苦にがめる

いと冷ひやき笑えみを湛たくへて、

ゆびさせる其足もとに、

玉たまの屑くづ、埴はに土のかたわれ。

つぎなる汝なれはいかにせし、

こはすさまじき姿かな。

そのかみの藤らふたき風情ふぜい、

嫋なよたけ竹の、あえかのなれも、

鈍おぞなりや、宴うたげのくづれ、

みだれ髪がみ、肉ししおきたるみ、

酒さけの香かに、衣きぬもなよびて、

踏ふむ足も酔よひさまだれぬ。

あな忌々し、とく去ねよ、

さて、また次のなれが面

みれば麗容うつろひて、

かなしみ  
悲削ぎしやつれがほ、

ゆびくしほ  
指組み絞り胸隠くす

さうてぶり  
双の手振の怪しきは、

えんこん  
饞えたる血にぞ、怨恨の

ばみ  
毒ながすなるくち蝮を

おほ  
掩はむためのすさびかな。

また「驕慢」に音づれし

えもの  
なが獲物をと、うらどふに、

ぞめ  
えび染のきぬは、やれさけ、

しやくげ  
笏の牙も、ゆがみたわめり、



又、なにものぞ、ほてりたる  
 もろ手ひろげて「樂欲」に

らうがはしくも走りしは。

すぬきやう  
 酔 狂の抱擁酷く

唇を噛み破られて、

まんめん  
 満面に爪あとたちぬ。

きよう  
 興ざめたりな、このくるひ、

われを棄つるか、わが「想」、

あはれ、耻かし、このみざま、

なれみづからをいかにする。

おこなひ  
 しかはあれども、そがなかに、  
 行清きたゞひとり、

きぬもけがれと、はだか身に、

出でゆきしより、けふまでも、

あだし「想」の姉妹と

道異なるか、かへり來ぬ、

——あゝ行かばやな——汝がもとに。

法苑の奥深く

素足の「愛」の玉容に

なれば、ゐよりて、睦みつゝ、

靈華の房を摘みあひて、

うけつ、あたへつ、とりかはし

双の額をこもごもに、

飾るや、一の花の冠

ホセ・マリヤ・デ・エレデイヤは金工の如くアンリ・ドウ・レニエは織人の如し。

また、譬喩を珠玉に求めむか、彼には青玉黄玉の光輝あり、此には乳光柔き蛋白石の影を浮べ、色に曇るを見る可し。

譯者



## 延びあくびせよ

延のびあくびせよ、傍かたはらに「命」は倦みぬ、

——朝あさけ明より夕をかけて熟うまい睡する

その臍らふたげさ勞つからしさ、

ねむり眼のうまし「命」や。

起きいでよ、呼ばゝりて、過ぎ行く夢は

大影おほかげの奥にかくれつ。

今にして躑ためらひ躑ためらひなさは、

ゆく末なんに何しるべの導しるべぞ。

呼ばゝりて過ぎ行く夢は

フランシス・キエレ・グリフィン

去りぬ神祕くしびに。

いでたちの旅路かての糧たにぎを手握りて、  
歩あゆみもいとゞ速はやまさる

愛の一念いんげんましぐらに、

急いそげ、とく行いけ、

呼よばゝりて、過あやぎ行く夢は、

夢は、また歸かへり來きななくに。

進すすめよ、走はせよ、物陰ものかげに、

畏おそをなすか、深淵しんえんに、

あな、急いそげ……あゝ遅おそれたり。

はしけやし「命いのち」は愛あいに熟睡うまいして、

栲綱たかつぬの白腕しろたむぎになれを巻まく。

——噫あお遅おそれたり、呼よばゝりて過あやぎ行く夢の

いましめもあだなりけりな。  
ゆきずりに、夢は嘲る……

さるからに、

むしろ「命」に口觸れて

これに生ませよ、藝術を。

無言を禱るかの夢の

教をきかで、無邊なる神に憧るる事なくば、

たちかへり、色よき「命」かき抱き、

なれが刹那を長久にせよ。

死の憂愁に歡樂に

靈妙音を生ませなば、

なが亡き後に残りゐて、

はた、さゞめかむ、はた、なかむ、

うれしの森に、春風や

若緑、  
去<sup>こ</sup>年<sup>ぞ</sup>を繰<sup>あ</sup>返<sup>こ</sup>の愛<sup>こ</sup>のまねぎ<sup>ぎ</sup>に。

さればぞ歌<sup>うた</sup>へ微笑<sup>ほほゑみ</sup>の榮<sup>はえ</sup>の光<sup>ひかり</sup>に。

## アルベエル・サマン

## 伴奏

白銀しろがねの筐はこ柳やなぎ、菩提樹ぼだいずや、榛はんの樹きや……  
 水みづの面おもに月つきの落葉おちばよ……

夕ゆふべの風かぜに櫛くしけづる丈たけなが長髮ながみの匂におふごと、  
 夏なつの夜よの薰かをりなつかし、かげ黒くろき湖みづうみの上うへ、  
 水か薰かる淡あは海うみひらけ鏡かがみなす波なみのかゞやき。

楫この音ねもうつらうつらに

夢ゆめをゆくわが船ふねのあし。



船のあし、空をもゆくか、  
かたちなき水にうかびて。

ならべたるふたつの櫂は  
「徒然」の櫂「無言」がい。

水の面の月影なして  
波の上の楫の音なして  
わが胸に吐息ちらばふ。

かぞへうた  
賦

色に賞めでにし紅薔薇こうさうび、日にけに花は散りはて、  
 唐棣花色はねずいろよき若立わかだちも、季ときことごとくしめあへず、  
 そよそよ風の手枕たまくらに、はや日數ひかずへ經しけふの日や、  
 つれなき北の木枯きたに、河氷かひるべきながめかな。

噫、歡樂よ、今さらに、なじかは、せめて争はむ。  
 知らずや、かゝる雄詔をとげびの、世よに類たぐひ無く烏潛をこなるを、  
 ゆゑだもなくて、徒ただに痴しれたる思、去りもあへず、  
 「悲哀」の琴きんの絲いとの緒をを、ゆし按あんずるぞ無益むやくなる。

ジアン・モレアス

ゆめ、な語りそ、人の世は悦おほき宴ぞと。

そは愚かしきあだ心、はたや卑しき痴れごうち。  
 ことに歎くな、現世を涯も知らぬ苦界よと。  
 益無き勇の逸氣は、たゞいち早く悔いぬらむ。

春日霞みて、葦蘆のさゞめくが如、笑みわたれ。  
 磯濱かけて風騒ぎ波おとなふがごと、泣けよ。  
 一切の快樂を盡し、一切の苦患に堪へて、  
 豊の世と稱ふるもよし、夢の世と觀するもよし。

\*

\*

死者のみ、ひとり吾に聽く、奥津城處、わが栖家。  
 世の終るまで、吾はしも己が心のあだがたき。  
 亡恩に榮華は盡きむ、里鴉島をあらさむ、  
 收穫時の頼なきも、吾はいそしみて種を播かむ。

ゆめ、自らは悲まし。世の木枯もなにかあらむ、  
 あはれ侮蔑や、誹謗をや、大凶事の迫害をや。  
 たゞ、詩の神の筥※の上、指をふるれば、わが樂の  
 日毎に清く澄みわたり、靈妙音の鳴るが樂しさ。

\*

長雨空の喪過ぎて、さすや忽ち薄日影、  
 冠の花葉ふりおとす栗の林の枝の上に、  
 水のおもてに、遅花の花壇の上に、わが眼にも、

照り添ふ匂なつかしき秋の日脚の白みたる。

日よ何の意ぞ、夏花のこぼれて散るも惜からじ、  
 はた禁めえじ、落葉の風のまにまに吹き交ふも。  
 水や曇れ、空も鈍びよ、たゞ悲のわれに在らば、  
 想はこれに養はれ、心はために勇をえむ。

\*

われは夢む、滄海の天の色、哀深き入日の影を、  
 わだつみの灘は荒れて、風を痛み、甚振る波を、  
 また思ふ釣船の海人の子を、巖穴に隠るふ蟹を、  
 青眼のネアイラを、グラウコス、プロオテイウスを。

又思ふ、路の邊をあさりゆく物乞の漂浪人を、

栖み慣れし軒端がもとに、休ひるる賤が翁を、  
 斧の柄を手握りもちて、肩かゞむ杣の工を、  
 げに思ひいづ、鳴神の都の騷擾、村肝の心の痕を。

\*

この一切の無益なる世の煩累を振りすて、  
 もの恐ろしく汚れたる都の憂あとにして、  
 終に分け入る森陰の清しき宿求めえなば、  
 光も澄める湖の静けき岸にわれは悟らむ。

否、寧われはおほわだの波うちぎはに夢みむ。

幼年の日を養ひし大搖籃のわだつみよ、

ほだしも波の鳴鳥、呼びかふ聲を耳にして、

磯根に近き岩枕汚れし眼、洗はゞや。

噫いち早く襲ひ來る冬の日、なにか恐るべき。

春の卯月うつきの贈物、われはや、既に盡し果て、

秋のみのりのえびかづら葡萄も摘まず、新麥にひむぎの

豊とよの足穂たりほも、他あだし人ひと、刈かり干しにけむ、いつの間にま。

\*

けふは照日てるひの映はえ々ばえと青葉あをば高たか麥かむぎ生なひ茂る

大野おほのが上に空高く靡なびかひ浮うぶ旗はた雲ぐもよ。

和なぎたる海を白帆あけあげて、朱あけの曾保船そほふね走ること、

變化へんげ乏あをぞらしき青天あをぞらをすべりゆくなる白雲よ。

時ならずして、なれ汝も亦近づく暴風の先驅と、  
みだれ姿の影黒みしが蹙める空を翔りゆかむ、  
嗚呼、大空の馳はせづかひ使、添はばや、なれにわが心、  
心はなれ汝に通へども、世の人たえて汲む者もなし。



嗟嘆  
といき

静かなるわが妹、君見れば、想すゞろぐ。

朽葉色に晩秋の夢深き君が額に、

天人の瞳なす空色の君がまなこに、

憧るゝわが胸は、苔古りし花苑の奥、

淡白き吹上の水のごと、空へ走りぬ。

その空は時雨月、清らなる色に曇りて、

時節のきはみなき鬱憂は池に映るひ

落葉の薄黄なる憂悶を風の散らせば、

ステファンヌ・マラルメ

いぎよひの池いけみづ水に、いと冷ひやき綾あやは亂れて、  
ながながしくちなし梔子の光さす入日たゆたふ。

物象を靜觀して、これが喚起したる幻想の裡、自から心象の飛揚する時は「歌」成る。さきの「高踏派」の詩人は、物の全般を採りて之を示したり。かるが故に、其詩、幽妙を虧き、人をして宛然自から創作する如き享樂無からしむ。それ物象を明示するは詩興四分の三を没却するものなり。讀詩の妙は漸々遅々たる推度の裡に存す。暗示は即ちこれ幻想に非らずや。這般幽玄の運用を象徴と名づく。一の心状を示さむが爲、徐に物象を喚起し、或は之と逆まに、一の物象を採りて、闡明數番の後、これより一の心状を脱離せしむる事これなり。

ステファンヌ・マラルメ

白楊 はくやう

落日の光にもゆる

白楊 はくやう の 聳 そび やく 並木、

谷隈になにか見る、

風そよぐ梢より。

## 故國

小鳥でさへも巢は戀し、

テオドル・オオバネル

まして青空、わが國よ、  
うまれの里の波羅葦増雲。

## 海のあなたの

海のあなたの遙けき國へ  
いつも夢路の波枕、  
波の枕のなくなきぞ、  
こがれ憧れわたるかな、  
海のあなたの遙けき國へ。

オオバネルは、ミストラル、ルウマニユ等と相結で、十九世紀の前半に近代プロワ  
ンス語を文藝に用ゐ、南歐の地を風靡したるフェリイブル詩社の翹楚なり。

「故國」の譯に波羅葦增雲とあるは、文祿慶長年間葡萄牙語より轉じて一時、わが日本語化したる基督教法に所謂天國の意なり。

譯者

## アルトウロ・グラアフ

解悟かいご

頼み入りし空あだなる幸さちのひと一つだにも、忠まご心ありて、

とまれるはなし。

そをもふと、胸むねはふたぎぬ、悲かなにならぬ胸も

にうれひがき憂うれひに。

きしかたの犯をかしの罪ひとの一つだにも、懲こらしの責せめを

のがれしはなし。

そをもふと胸むねはひらけぬ、荒屋あばちやのあはれの胸も

高たかき望ぞらに。



## ガブリエレ・ダンヌンチオ

篠懸  
すゞかけ

白波しらなみの、潮騒しほぎゑのおきつ貝なす

青緑あをみどりしげれる谿たにを

まさかりの眞晝しろうぞ知す。

われは昔の野山の精せいを

まなびて、こゝに宿すゞかけからむ、

あゝ、神寂すゞかけびし篠懸すゞかけよ、

なれがにほひの濡髪ぬれがみに。



## 海光

兒等よ、今晝は眞盛、日ごとくに照らしぬ。

寂 寞 大海の禮拜して、

天津日に捧ぐる香は、

淨まはる潮のほひ、

轟く波凝、動かぬ岩根、靡く藻よ、

黒金の船の舳先よ、

岬代赭色に、獅子の蹈留れる如く、

足を延べたるごと、入海のひたおもて、

うちひさす都のまちは、

煩悶の壁に惱めど、

鏡なす白川は蜘蛛手に流れ、

風のみひとり、たまさぐる、

洞穴口の花の錦や。



## 青空文庫情報

底本：「上田敏全訳詩集」岩波文庫、岩波書店

1962（昭和37）年12月16日第1刷発行

1979（昭和54）年10月10日第19刷発行

※底本の本文は、序の組みに対して2字下げになっていますが、注記は省きました。

入力：阿部哲也

校正：川山隆

2011年2月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 海潮音

上田敏

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 上田敏訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>